

ムハツガバート現象

長沢栄治

社会的規制と
自己表現

どんな服を着るのかは、よく言われるように、さまざまな社会的規制と服を着る本人の自己表現との間のせめぎあいの産物である。もつとも、流行の波、あるいは企業的規律に身を委ね、こうした緊張関係を自覚しないのが普通多いのかもしれない。しかし場合によっては、衣服の選択が決死の覚悟を強いる状況も存在する。

一九九一年二月、カイロの南方約百キロメートルにあるバニー・スエフ県の鉄道で、「イスラム過激派」集団が、ヴェールをつけていない女性の乗客が列車に乗るのを妨害し脅迫する事件が起きた。新聞によれば、この事件を警察に通報した女性たちが、これら「過激派」の報復を恐れ匿名を希望したというところに、近年とくに南部エジプト地方に高まっている宗教的緊張の深刻さが窺われる。警察に逮捕されたこの事件の犯人、十名の「過激派」の年齢は、十七―三十二歳

(平均二十四・三歳)、その大半が地方公務員や学生という教育を受けた階層であった(以上、*al-Ahram* 紙、一九九一年二月七日記事)。

ヴェール現象の

二つの解釈

一九七〇年代以降のイスラム化現象のなかで、ヴェールをまといイスラム的規律に従った衣服を身につける女性たち(エジプト方言のアラビア語でこれをムハッガバートと呼ぶ)の数が増加したといわれる。このムハッガバート現象に関しては、これまでさまざまな解説がなされてきた。それらをここですべて紹介することはできないが、ただ、初めにあげた図式に合わせた単純な解釈を試みるなら、その議論には次の二つの方向を認めることができるように思える。すなわち、第一の見方によれば、この現象は宗教の規範を媒介にした男の支配(家父長制)の貫徹であるが、別の観点に立てば、宗教を通じてたひとりの女性の社会的な自己主張の表現形態にほかならない。

もともと、上述のような暴力的事件や、革命後のイラン、最近のスターダンのような国家によるヴェール使用の強制の事例を目の当りにすると、前者の解釈、すなわち男の利害の押しつけという理解の方がより説得的に思えてしまうのもやむを得ない。事実、この解釈に有利な材料は表面的な日常生活に満ち溢れている。たとえば、カイロの露天の本屋で売られている実用書、エチケット集の類いは、女性の衣服についておおむね次のような条件を並べ立てている。

衣服は体全体、顔と両手を除いて覆うこと、透けて見えないような厚手の生地であること、人の視線を集めるような派手な服はダメ(「悪魔の笑うような」色のヴェールも)、体の線をあらわに

بريشة : جمعة



... لا باشيخة دى مزوداها قوى .. ده الحجاب مغطى راسها .. ود عقلها ..

「ねえちょっと、あれ、やりすぎじゃない。あのヴェール、頭ばかりじゃなく、『理性』も隠してるわ。」(Rose El-Youssef, 1990年3月19日)

しないダブダブの服(腰のベルトは付けない)云々。さらには、衣ずれの音を大きくたててはいけないとか、ヴェールをしながら男子と臨席するとはせっかくの信心も台無しとか、これらの訓徳書を執筆したアズハル(イスラムの最高学府)のシャイフ(長老)たちの注文のそれは口うるさいこと。

なぜヴェールを着るのか

さて、これに対し、ムハッガバートになろうとする女性の内面的な動機について、外部社会の観察者が利用できる客観的な資料は限られている。ここでその一部を紹介するのは、社会調査では定評のある、カイロの国立社会学・犯罪学研究センターの調査報告『女子大生におけるヴェール現象の調査』(一九八〇年)である。この調査は、ムハッガバートの女子学生二〇一名に対し、出身地や父親の職業などの社会的特徴から、外交問題に関する意見にいたる八七の質問を試みたものである。その結果、一般にムハッガバートの学生はヴェールをつけていない

学生（調査対象一八七名）と較べると、相対的に両親の教育水準が低く、また低所得層の出身の比率が高いという特徴があることが分かる。

ここでいうムハツガバートの服とは、着ている本人たちによれば、「見えず、分からず、はつきりせず」の完璧な状態を指し（七八％）、ゆったりしたガラビヤ（エジプト長衣）程度でよいというのは少数（一一％）であった。注目されるのは、こうした服を着るのを家族から反対されている人が一六％おり、ムハツガバートとなるにはそれなりの決意が必要だということである。

なぜムハツガバートとなるのか、その理由の大半（七四％）は、「神に近づく」あるいは「信心に目覚める」ためであった。彼女たちが相談相手の第一に挙げるのは宗教者であり（八三％）、新聞・ラジオ・テレビの宗教関係の記事・番組を好み、また多くの人（七二％）が映画は宗教的価値・道徳から離反していると考えるので見に行かないと答えている。そして実際、ヴェールを着けてよかったこと、それは「やすらぎと平安を覚える」（五〇％）、「尊敬されるようになった」（二一〇％）、そして「公道で嫌な目に会わなくなった」（二一〇％）ことだという。とくにこの最後の答えは、その背景に今日のエジプトの緊張に満ちた都会生活を連想させる。たとえば、前述の訓徳書が、結婚に必要なマンションも買えない多くの若者との過ちを起さぬよう身を護るためにヴェールをつけろと脅しているのもそれなりの効果があるのであろう。

強制のは非と背景

では、こうしたヴェールを他人に強制すべきか。ヴェール着用の法制化を求める人は三三％であり、個人にまかせせる五二％、家族の判断が一五％で

あった。法的に強制する必要がないとする後者の二つの意見をもつ人たちは、「ヴェールが単なる衣装ではなく義務だ」ということは個人で確信をもつべきことだから」、そして「社会を改革するのは家庭からだから」とその理由を述べている。前にあげたムハッガバート現象の解釈の問題のためには、こうした個人と家に関する彼女たちの意識をより深く知る必要があるだろう。彼女たちの多くは、女性に教育が必要なのは良い妻になるためと考え、家の外での労働にも多くが消極的な回答をしているが、そうした「家」の中に籠ろうとする心情を「社会」に対する無関心、逃避の表れと簡単に断定することはできないからである。

最後に、ムハッガバートにならない女子学生の声も少し聞いておこう。彼女たちはムハッガバートの友人をどう見ているだろうか。この問いに対し、四八%の人が「宗教と神の教えを守り尊敬できる」と答えているが、「ヴェールをつけているけどそれほど道徳心の高くない人もいる」、「信仰とその行動が一致しない人もいる」という意見が二八%あった点もまた興味深い。

(ながさわ えいじ／アジア経済研究所地域研究部副主任調査研究員)



ラクダ市で商談する男たち（カイロ：インババ，撮影：野村茂樹）